

アジア・アフリカ言語文化研究所

東京外国語大学

要覧 1982



目 次

概 要

歴史と性格	1
組 織	2
職 員	4

研究活動

共同研究プロジェクト	6
共同研究員(公募)	11
研究生	11
研究部門図	12
言語情報機械処理	14
言語研修	15
海外学術調査	16
助手等の現地投入	16
外国人研究員	17

施 設

電算機室	19
図 書 室	20
音声学実験室	20
出版物一覧	21

—表紙写真説明—

イラン、ケルマーンシャーハーン州セガーヴィーの村人たち。セガーヴィーとは「三頭の牛」の意味で、この村にある三つのタッパ（遺丘）にちなんで名付けられたものらしい。紀元前6000年にさかのぼる遺跡である。右手すみに見える川はガーマーサーブ。西アジアのロゼッタ石と称されるアケメネス朝ダリウス大王の碑文で有名なビーストゥーンを過ぎ、イランの古都中興の古都スーサ郊外を南下して、やがてチグリスに注ぐ。

悠久の水の流れと、革命と戦争と、そして今もなお大地と格闘しつつ生きるこの村人たち。そして、その中に粉れ込んだ異邦人の自分。現地を研究するとは、一体どういうことなのか？ この間のゆえに、われわれはなおのこと現地に執着する。(上岡弘二)

INSTITUTE FOR THE STUDY OF LANGUAGES
AND CULTURES OF ASIA AND AFRICA

TOKYO GAIKOKUGO DAIGAKU
4, NISHIGAHARA, KITA-KU, TOKYO 114
TEL 03-917-6111
Cable Address: GENGOBUNKA TOKYO

概 要

歴 史 と 性 格

アジア・アフリカ言語文化研究所は、人文科学・社会科学系では、わが国ではじめての共同利用研究所です。

本研究所の目的はアジアおよびアフリカの言語文化に関する総合研究、これらの地域における諸言語の辞典編纂、および教育訓練を行うことにあります。

すなわち：

- 1) アジア・アフリカの言語、およびそれを通じて、これらの地域の歴史・社会・文化を直接研究すること。
- 2) それらの言語による資料の利用を容易にするための辞典を作ること。
- 3) それらの言語習得を助けるため、言語研修を実施すること。

以上の三点が本研究所の主要な目的です。

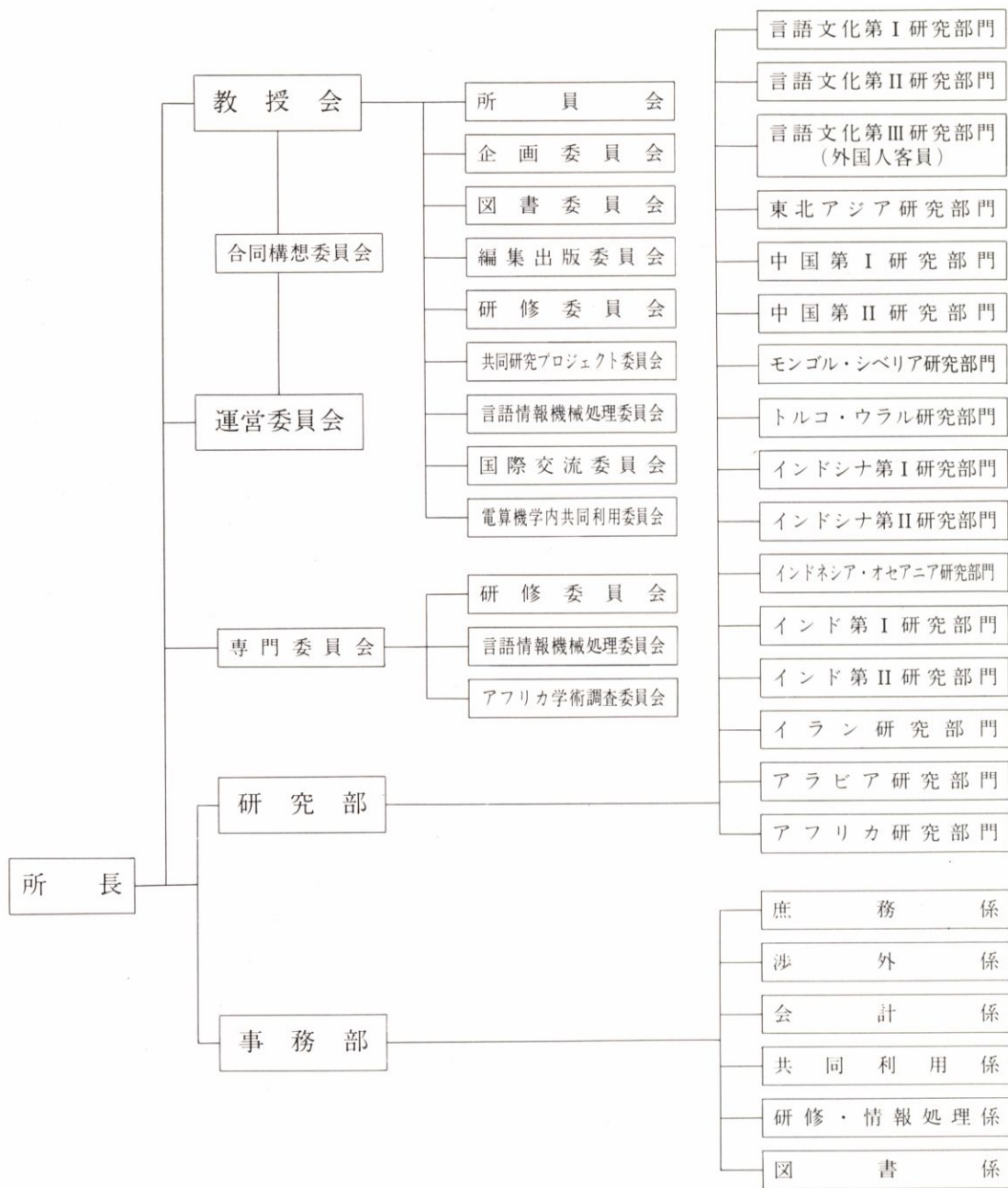
* * *

共同利用研究所は、あらゆる種類の研究機関に所属する専門の研究者の便宜をはかるために設備や資料を提供し、相互の接触や交換の機会をつくり、それによって研究の発展・進歩を促すことを目的としています。

戦後日本の復興が進むとともに、その運命がアジア・アフリカ諸国と深くかかわりあっていることが認識されはじめました。このような背景のもとに1961年に学術会議がアジア・アフリカ言語文化研究所を設立するよう勧告しました。その後、各方面の理解と協力を得て、1964年4月1日に、東京外国語大学の附置の共同利用研究所として本研究所が設立されることになりました。以来、整備拡充が進み、今日では16部門の研究所に成長しました。



組 織



職員数

(1982年4月1日現在)

区分	教授	助教授	講師	助手	その他の職員	計
定員	(2) 15	14	0	10	33	(2) 72
現員	(2) 14	13	0	10	33	(2) 70

()は外国人客員数を外数で示す

運営委員会

研究所の日常の業務の運営は、教授・助教授で組織する教授会において行われますが、共同利用研究所としての公開性を保つため、これとは別に運営委員会が置かれ、研究所の運営の基本方針などの重要な事項について、所長の諮問に答えます。運営委員には研究所の教授・助教授、および所外の学識経験者など、25名以内が委嘱されます。第9期(1981.2~1983.1)の運営委員は現在以下の通りです。

荒松雄	津田塾大学教授	中根千枝	東京大学教授
石川栄吉	東京都立大学教授	西田龍雄	京都大学教授
井上和子	国際基督教大学教授	林栄一	大阪外国語大学学長
大江孝男	所員	伴康哉	大阪外国語大学教授
岡田英弘	所員	坂野正高	国際基督教大学教授
小沢重男	東京外国語大学教授	藤枝晃	京都大学名誉教授
黒柳恒男	東京外国語大学教授	三根谷徹	国学院大学教授
小泉文夫	東京芸術大学教授	護雅夫	日本大学教授
小堀巖	東京大学助教授	八木健三	北星学園大学教授
柴田武	埼玉大学教授	山田信夫	大阪大学教授
祖父江孝男	国立民族学博物館教授	山本登	慶応義塾大学名誉教授
田町常夫	九州大学教授	渡部忠世	京都大学教授
富川盛道	所員		

専門委員会

また、所長の諮問に応じて、研究所の共同研究に関する専門的事項を審議する専門委員会が三つあり、それぞれ所外の学識経験者のうちから委嘱されます。1982年度の委員は以下の通りです。

研修委員会

相浦杲(大阪外国語大学教授)、池上二良(北海道大学教授)、大東百合子(津田塾大学学長)、小沢重男、黒柳恒男、五島忠久(大阪大学名誉教授)、柴田武、柴田紀男(天理大学助教授)、西田龍雄、伴康哉、半田一郎(東京外国語大学教授)、松山納(国際大学教授)、三根谷徹

言語情報機械処理委員会

植村俊亮(工業技術院電子技術総合研究所主任研究官)、田町常夫、長尾真(京都大学教授)、中山和彦(筑波大学教授)、西村恕彦(東京農工大学教授)、淵一博(工業技術院電子技術総合研究所情報部長)

アフリカ学術調査委員会

石川栄吉、伊谷純一郎(京都大学教授)、小堀巖、柴田武、祖父江孝男、矢内原勝(慶応義塾大学教授)、和崎洋一(富山大学教授)

職 員

所長（併）北 村 甫

研 究 部 （五十音順）

- | | |
|--------------------------|---------------------------|
| 教授 飯 島 茂：アジアの国民形成 | 助教授 池 端 雪 浦：東南アジア近・現代史 |
| 教授 石 垣 幸 雄：文論 | 助教授 石 井 溥：南アジアの人類学 |
| 教授 梅 田 博 之：朝鮮語 | 助教授 加賀谷 良 平：音響音声学 |
| 教授 大 江 孝 男：朝鮮語 | 助教授 上 岡 弘 二：イラン語 |
| 教授 岡 田 英 弘：東アジア史 | 助教授 川 田 順 造：西アフリカ社会 |
| 教授 北 村 甫：チベット語 | 助教授 中 嶋 幹 起：中国語 |
| 教授 坂 本 恭 章：アウストロアジア諸語 | 助教授 中 野 暁 雄：セム・ハム諸語 |
| 教授 富 川 盛 道：アフリカの社会と文化 | 助教授 永 田 雄 三：トルコ近代史 |
| 教授 中 村 平 次：インド現代史 | 助教授 松 下 周 二：アフリカの言語 |
| 教授 奈 良 毅：インド・アールリア諸語 | 助教授 三 木 亘：イスラム近代史 |
| 教授 橋 本 萬太郎：シナ・チベット諸語 | 助教授 守 野 庸 雄：日本語・スワヒリ語対照研究 |
| 教授 原 忠 彦：イスラム教徒社会 | 助教授 家 島 彦 一：イスラム中世史 |
| 教授 日 野 舜 也：アフリカ都市社会の比較研究 | 助教授 湯 川 恭 敏：理論言語学、バントゥ諸語 |
| 教授 山 口 昌 男：文化記号論 | 助 手 梶 茂 樹：バントゥ諸語 |
| | 助 手 新 谷 忠 彦：言語哲学 |
| | 助 手 高知尾 仁：アフリカの象徴論 |
| | 助 手 辻 伸 久：中国語 |
| | 助 手 内 藤 雅 雄：インド近代史 |
| | 助 手 中 見 立 夫：内陸・東アジアの国際関係史 |
| | 助 手 羽 田 亨 一：イラン史 |
| | 助 手 水 島 司：南インド近・現代史 |
| | 助 手 森 幹 男：インドシナ比較文化史 |
| | 助 手 山 本 勇 次：東南アジアの文化人類学 |



1980年7月ケニアのアンボセリにて（湯川恭敏）

事 務 部

事務長 坂 元 治
 文部事務官
 事務長補佐 宮 森 てる子
 文部事務官

庶 務 係

係長 下 野 茂
 文部事務官
 文部事務官 井 上 由美子
 文部事務官 関 根 彰
 文部事務官 福 井 光 雄
 文部事務官 (タイピスト) 谷 川 かつ子
 文部技官 (自動車運転手) 埜 和 雄

渉 外 係

係長 阿 部 吉 弘
 文部事務官
 文部事務官 松 岡 環
 文部事務官 佐久間 敬 喜

会 計 係

係長 鈴 木 邦 叔
 文部事務官
 会計主任 佐 藤 秀 規
 文部事務官
 文部事務官 成 瀬 智
 文部事務官 田 村 猛
 文部事務官 乙 訓 寛 雅
 文部事務官 (守 衛) 荒 井 義 安
 用 務 員 植 田 カツエ

共同利用係

係長 石 橋 徳三郎
 文部事務官
 共同利用主任 田 川 恵 二
 文部事務官
 文部事務官 津 田 貞 子
 文部事務官 金 井 京 子
 文部事務官 大 村 和 子



ハイラックス、1981年1月ケニアのツァポにて (湯川恭敏)

研修・情報処理係

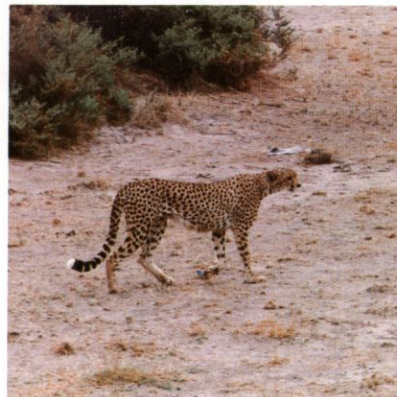
係長 浅 見 義 則
 文部事務官
 文部事務官 岡 田 ほなみ
 文部事務官 中 嶋 弘 子
 文部技官 今 井 健 二

図 書 係

係長 小 倉 三 郎
 文部事務官
 図書主任 石 川 恵 子
 文部事務官
 文部事務官 中 川 陽 子
 文部事務官 鈴 子 喜久子
 文部事務官 須 郷 知 子
 文部事務官 山 木 宏 明



1975年9月タンザニアのンゴロンゴロにて (湯川恭敏)



1980年7月ケニアのアンボセリにて (湯川恭敏)

研 究 活 動

共同研究プロジェクト

共同利用研究所での研究は、所員が個人研究テーマを持って研究を行うとともに、所外の研究者と協力することになっています。そのために共同研究員の制度があり、共同研究プロジェクトを組織し、研究を進めています。1982年度のプロジェクト（カッコ内は研究代表者）の研究計画と共同研究員は以下の通りです。

言語研修（奈良 毅） 所員 12名

本年度は東京会場において、アラビア語、ハンガリー語、大阪会場（国立民族学博物館）においてフルフルテ語の研修を行う。

専門委員会は5月と翌年3月の2回、専門委員・共同研究員の合同研究会（成果報告検討会）を9月に開催する。教材作成及び研究連絡打合わせのため研修実施言語に関係の深い共同研究員が、東京と大阪で各々3回会合する。

以上の事業を通じて当研究所で実施している「言語研修」に関する諸問題、即ち研修のあり方、実施言語の選定のしかた、実施計画、テキストの構成、語学教育の方法、評価法、視聴覚教材導入の方法等々を検討するとともに、研修自動化のための実験的研究、さらに研修の基礎となるアジア・アフリカ諸言語と日本語との対照研究を行う。

アイダ・アデルガフォル・バスタウィ 江口一久 高井清仁 深谷ベルタ
浅津エルジェベット 大野 徹 徳永康元 溝上富夫
岩崎悦子 小泉 保 深谷志寿 ムハンマド・アリウ

出版物：言語研修テキスト（18言語、全65冊）

辞典編纂プロジェクト（橋本萬太郎） 所員 5名

電子計算機により、中国語、チベット語、クメール語、タイ語、満州語、その他の語彙資料を整理し、音韻論的、意味論的分析を行い、辞典編纂のための基礎的資料をつくる。

中国語部会は、今年度より三年計画で、漢字資料の一般的処理を目的として、最少一万字を対象とした網羅的な字音音付け作業を計画する。その第一段階として、今年度は漢字音音付けの範囲と規模の調査・選定、及び字音整理の枠組みの設定を行いたい。なお、以降は、来年度に選定された字音資料のカード取りと歴史的背景の研究、1984年度にその編表と成果の刊行をはかりたい。

クメール語部会は年3回程度の研究会を予定している。

阿辻哲次	遠藤光暁	川本邦衛	志村良治
雨堤千枝子	遠藤由里子	神田信夫	荘司格一
池沢実芳	尾崎雄二郎	クリスティン・	杉村博文
石沢良昭	オリガ・ザビヤロバ	ラマル	鈴木和子
伊東照司	落合守和	慶谷壽信	鈴木勝則
岩田 礼	金子真也	坂本比奈子	高田時雄
鶴殿倫次	辛島 昇	佐々木 猛	高橋 保

武信 彰	永上 正	本名信行	望月八十吉
辻本春彦	平井勝利	マイケル・シェラード	森 博達
富平美波	平田昌司	増野 仁	守屋宏則
長尾光之	福田権一	松尾良樹	保川チンタナー
原田寿美子	星 実千代	松村 潤	

出版物：アジア・アフリカ語の計数研究 1～20

言語処理研究（松下周二） 所員 6名

1. アジア・アフリカ言語文化研究所コンピューターシステムに対するソフトウェアサポート

画像処理，漢字処理，パターン認識など，研究所のスタッフだけではカバー出来ない分野のソフトウェアを共同研究員などの協力を得て開発し，あるいは移植をはかります。

2. CAI (Computer Aided Instruction)

外国語学習における CAI の利用についての共同研究を行います。

井上史雄	沢村正信	中島 久
及川昭文	清水克正	八村広三郎
荻野綱男	杉田繁治	堀口秀嗣

アジア・アフリカにおけるイスラム化と近代化に関する調査研究（三木 亘） 所員10名

1. イスラム世界の諸地域および諸生活類型を基層文化の側面から研究する。
2. 今年度はその第一段階として，基層文化のなかでも食の分野を中心とする。
3. 現状，歴史的過去を問わず，イスラム世界の人々の常食や料理，それに関する文化ばかりでなく，食の対象となる植物性・動物性その他さまざまなものの生産・流通などの構造的な問題，歴史的な変遷，またそれらに係わる象徴体系など多角的な面から検討する。

片倉素子	塩尻和子	柘植洋一	宮治美江子
小西正捷	清水宏祐	原 隆一	山形孝夫
佐々木 徹	鈴木 董	堀内正樹	山本太平
佐藤次高	ツイオン・ベン・シムエル	松原正毅	

出版物：「イスラム化」に関する共同研究報告 1～6

Studia Culturae Islamicae 1～19

アフリカ学術調査（富川盛道） 所員 12名

1980年度までは，大サバンナ地帯を主要対象としてきたが，昨年度からこの成果を基礎に大サバンナ地帯に推移するスーダン・サーヘル地帯をとりあげ，現地調査を含む共同研究プロジェクトを行っている。

この調査研究の目的は，スーダン・サーヘル地帯における優勢共通語のひとつであるハウサ・フラニ語の使用地域を主要対象にして，現在も活発にくり返されつつある民族集団の移動およびそれにともなう地域形成の過程を，生態的環境，リングァフランカの拡大，移住の歴史，部族関係の動態，都市村落間の社会関係などの諸側面から明らかにすることである。

昨年度は，科学研究費補助金により，予備調査を行ったが，本年度はその本調査（第一次）を実施するとともに，研究会による基礎研究を継続する。また，前年度

までの成果の一部をとりまとめ、刊行する作業を行う。

上田 将	岡崎 彰	端 信行	和田正平
上田富士子	小川 了	福井勝義	
江口一久	岸田袈裟	松園萬亀雄	
大森元吉	田中二郎	和崎春日	

出版物：アフリカ部族社会の比較研究 1～2

African Languages and Ethnography 1～16

アフリカ社会の形成と展開, 1980

南アジアの大河流域における農村社会の研究 (原 忠彦) 所員 6名

1. 1981年度のインド・タミルナードゥ農村調査(第二次)の諸成果に関しては、従来通り、辛島研究員を中心とする歴史編と原所員を中心とする現状編の二つに区分して、順次刊行していくことにする。その際にそれぞれの参加メンバーによる報告会をもち、研究会には外部(研究参加者以外)の関係者にも呼びかけ、立ち入った討論を提起し、論点の掘り下げを行うことはいうまでもない。その研究会は定期的に数回もつことを予定している。
2. 以上の作業と同時に、1982年度以降に予定されているバングラデシュ、スリランカーでの現地調査を成功させるために文献研究を中心とする予備研究活動を組織的に進める。そのための特別研究会等も必要に応じて召集するものとする。
3. 上記に関連して、研究成果の刊行を期する。その細目は新年度の開始時に確定するものとする。

白田雅之	菱口善美	徳永宗雄
辛島 昇	佐藤 宏	中村尚司
小西正捷	谷口晋吉	柳沢 悠

出版物：南アジアの大河流域における農村社会の研究 1～5

Studies in Socio-cultural Change in Rural Villages in India 1～5

ヒマラヤ・チベットの生態・言語・文化に関する総合研究 (飯島 茂) 所員 4名

1975～76年度には、科学研究費補助金により、「中国・インド文明接触地帯における自然、生態と文化に関する調査」を行い、その接触過程が典型的に観察される地域の学際的研究を行う立場から、1977～79年度にヒマラヤ・チベット地域に焦点をあてて言語・文化・社会に関する総合研究を行ってきた。その結果、1980年度には、科学研究費補助金により、「ネパールにおける国民形成の人類学的・言語学的調査」の第一次調査を行うことができた。同調査は第二次を1982年度、第三次を1984年度に行う予定である。本年度は、第一次調査の成果を踏まえ、第二次以降の現地調査のための準備作業を進める。

関根康正	西 義郎	三瓶清朝
立川武蔵	西田龍雄	御牧克己
長野泰彦	星 実千代	山口瑞鳳

出版物：ヒマラヤ・チベットの生態・言語・文化に関する総合研究：YAK 1～5

Monumenta Serindica 1～10

日本の言語文化比較研究資料の充実 (岡田英弘) 所員 5名

前々年度から「日本研究資料特別購入費」が予算化されたのに伴ない計画的な資料蒐集が必要である。

所外の各界の専門研究者との協力により、特長ある事業遂行のため日本の言語文化の特質を検討するほか、目録の整備、そのコンピュータ化を実施し、オンライン・リファレンスへの準備を行う。

出版物：日本の言語文化研究リプリント・シリーズ 1～2

アジアの民族運動とその国際関係 (中村平次) 所員 4名

1. 昨年度に続いて、戦間期アジアの民族運動の多様な発展を国際関係の発展のなかで追究するものとする。とくに、諸地域における民族自決と主権回復の思想形成と国際的な連帯の発展という二点について、留意するものとする。
2. 他方、第二次大戦後のアジアの諸発展を国家建設と民主主義の問題、さらに、国際関係の面における主権国家間の新しい問題に重要な関心を払うものとする。そこでは、国家の権力規定と政権の性格規定の相互関係に留意する。
3. 以上の狙いを実現するために、年に2回の定例研究会を持ち、参加者の意志疎通を円滑にする一方、報告をめぐり、討論を深めるなかで、認識を新しくする。
4. アジア地域からの客員教授にも適宜、報告・討論に参加していただく。
5. 1982年度には、研究成果刊行は予定していない。

伊藤秀一	桐山 昇	八尾師 誠	由井正臣
小田英郎	四宮宏貴	藤田 進	吉村慎太郎
木畑洋一	清水 透	松本脩作	
木村英亮	中村 義	山内昌之	

アジア・アフリカにおける象徴と世界観の比較研究 (山口昌男) 所員 2名

アジア・アフリカおよびアメリカの土着社会の説話・神話儀礼を特に時間・空間観念との関連において研究し、この方面における比較研究および民族学・神話学および言語学的分野間の方法論的接合点を探る。

青木 保	今福龍太	栗本慎一郎	中村雄二郎
阿部年晴	上野千鶴子	清水昭俊	原 広司
市川 浩	大室幹雄	坪井洋文	宮田 登
市川雅章	木田理文	長島信弘	横井 清

出版物：Performance in Culture 1

言語文化調査票 (石垣幸雄) 所員 9名

目的：アジア・アフリカ言語文化研究所言語・文法調査票作業と補い合う超語意文法事象の採集記入整理簿の第一次案作成

方式：第一次3年計画第2年度、総員式省エネ型実験的ミニプロ

1) 個別対話交信 2) 総会年1～2回

成果：1. 団語集

1.1 動植物名の熟語法・海洋篇 faunal-floral idiomatics : marine

1.2 動植物名の熟語法・陸上篇 faunal-floral idiomatics : terrestrial

2. 成句集

3. 格言集

3.1 (昨年度刊行)

安溪遊地 金 東俊

出版物: Phraseological Questionnaire 1-1, 3-1

アジア・アフリカ諸言語の研究 (奈良 毅) 所員 13名

アジア・アフリカの諸言語を音韻, 文法, 語彙等の各面から研究する。

所員, 共同研究員, 協力者は上記の班のいずれかに参加し, 各班とも週ないし月に一度程度の会合を持ち, 共同研究を行い, かつ年に一~二度の総会を持つ。研究成果は年報等の形で公にする。各班の今年度の研究計画は次の通りである。

音韻班: 1981年度に引き続き, 諸言語の *suprasegmental* な現象を, 現地調査にもとづいた発表を通し, 比較研究する。

文法班: 文法調査表の作成をめざし, 諸言語の文法構造の輪郭を各専門家が呈示し言語の文法についての知識を集約するとともに, どのようなことがらが文法調査に含まれるべきかを討論する。

語彙班: 1981年度に引き続き, アジア・アフリカ諸語の語彙調査の為のハンドブック作製の為の共同討議を行う。

アミール・モハバット	杉田 洋	中島 久	村崎恭子
岩田 礼	田村すず子	繩田鉄男	森口恒一
大島 稔	チャールズ・モリスン・デウルフ	橋本 勝	藪 司郎
奥平龍二	土田 滋	早田輝洋	山田幸宏
小田真弘	角田太作	原 誠	吉川 守
カリヤン・ダスグプタ	徳永宗雄	福原信義	
崎山 理	鳥羽季義	溝上富夫	
柴田紀男	富田健次	三谷恭之	
下宮忠雄	長 弘毅	宮岡伯人	

出版物: アジア・アフリカ文法研究 1~10

アジア・アフリカ文法便覧 32冊

口頭伝承の比較研究 (川田順造) 所員 7名

口で語る, 口で伝えるということが, 他の表現・伝達手段——文字, 図像, 音楽, 身体表現 (舞踊, マイム等) など——との関連でもつ意味を広い視野での比較によって検討する。このため, いわゆる口頭伝承の研究者だけでなく, 言語学, 文学 (古代文学, 説話文学, 語りもの等), 歴史学 (口頭伝承と文字記録の歴史上の位置等), 美術史・図像学 (曼陀羅などの絵解きも含む), 音楽 (とくに語りもの, うたいものの音楽的側面), 舞踊, 等の研究者に広く参加を求め, 学際的交流の中での探索を試みる。

初年度は, 参加者各自の個別的研究の発表を中心に自由に討議を行い, 第二年度以降は, 次第に問題をしばって, 共同研究をすすめる方針である。

阿部謹也	大林太良	西江雅之	山本吉左右
雨宮裕子	小沢俊夫	野村純一	横道萬里雄
伊藤亜人	君島久子	林 雅彦	若桑みどり
江口一久	徳丸吉彦	堀内 勝	
大谷紀美子	友枝啓泰	宮田 登	
大貫良夫	新倉朗子	山口 修	

共同研究員（公募）

1978年度より共同研究プロジェクト（6ページ～10ページ）とは別に、当研究所において一定期間研究を行う共同研究員を公募しており、本年度は次の諸氏に委嘱しています。

高谷紀夫	石上悦朗	松村文芳
川崎有三	濱畑祐子	宮坂敬造

研 究 生

大学卒業かそれと同等以上の学力のある者が研究所で研究に従事することを希望するときは、研究生として入所を許可することがあります。

研究生は入所料と研究料を納付し、指定の教官の指導を受けます。

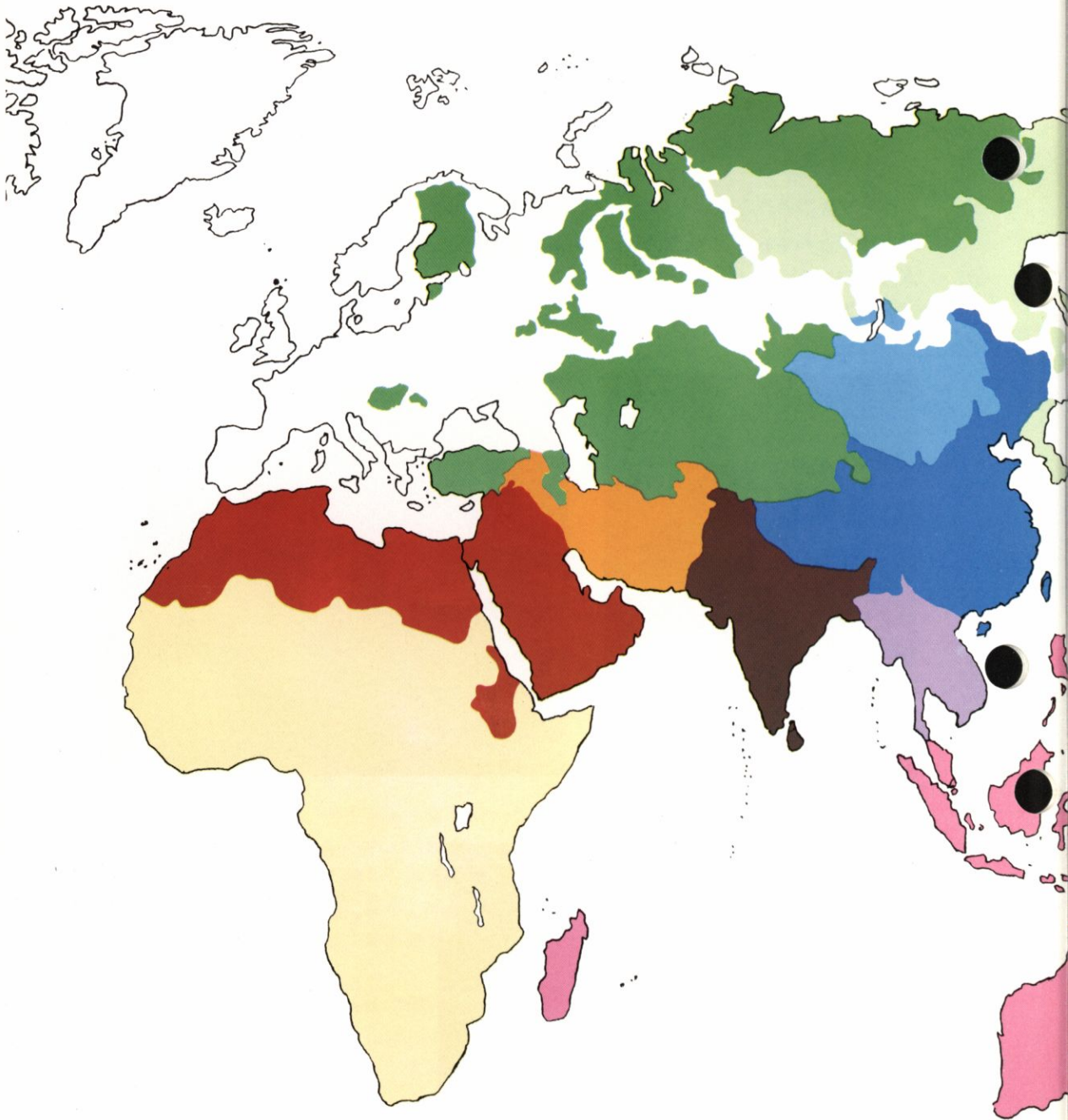


上左：村のヤギが流行病で多数死に、担ぎ出された神様。セクシーな身振りや歌の女装の踊り手を先頭に、これから一晩かけて村をひと巡りする。1981年12月南インド、ネイクラム村にて。（水島 司）

上右：北インド・クルクシュートラの農家の朝。チャバーティーを焼く女の子。この年齢で、遠くビハールからの“出稼ぎ”である。（内藤雅雄）

左：チュニジア・ガーベス湾では、秋になるとタコ漁がはじまる。500個以上のタコ壺を一本の綱糸で結び、水深20m位の海底に設置する。2日後、30～40匹のタコが入れば、大漁である。（家島彦一）

研究部門図





研究部	研究部門 (開設年度)	研究分野または対象とする言語文化
一般	言語文化第 I (1964年度)	一般言語学理論・文法記述理論・語彙記述理論・コンピュータ言語学・一般音声学理論・音素論・音声実験理論など
	言語文化第 II (1967年度)	民族学・歴史学・地理学など
	言語文化第 III (外国人客員研究部門) (1979年度)	言語・文化, 民族学, 歴史学, 地理学等の分野における, 特に現地人研究者又は現地研究の欧米専門家との共同研究による地域研究法の開発
東アジア	東北アジア (1966年度)	朝鮮語・ツングース語(満洲語・その他のツングース語)・極北諸語(チュクチ語・ユカギル語・ギリヤーク語・アイヌ語など)および文化
	中国第 I (1968年度)	中国諸方言(北京語・呉語・福建語・広東語・客家語など)および文化
	中国第 II (1979年度)	チベット語(現代チベット語・チベット文語など)・イ語(ロロ語)・チュワン語・回族の諸言語などおよび文化
北および中央アジア	モンゴル・シベリア (1982年度)	モンゴル諸語(ハルハ方言・ブリヤート方言等)・カルムイク語・モンゴル語・ダグール語・モゴール語および文化
	トルコ・ウラル (1971年度)	チュルク諸語(トルコ語・オスマン語・ウイグル語・ウズベク語・タタール語・チュヴァシ語・ヤクート語など), ウラル諸語(フィン語・ハンガリー語)および文化
東南アジア	インドシナ第 I (1964年度)	ベトナム語・タイ語・ラオス語などおよび文化
	インドシナ第 II (1969年度)	ビルマ諸語・モン語・カンボジア語などおよび文化
	インドネシア・オセアニア (1967年度)	インドネシア語(マライ語)・ジャバ語・タガログ語・ヒサヤ語・マラガシ語・メラネシア諸語・ポリネシア諸語・パプア諸語などおよび文化
南アジア	インド第 I (1965年度)	ヒンディー語・ウルドゥー語・ベンガル語・マラーティー語・クジャラーティー語・シンハリー語・サンスクリット語・パーリ語などおよび文化
	インド第 II (1978年度)	ドラヴィダ諸語(タミル語・テルグ語・カンナダ語・マラヤラム語)・ムンダ諸語および文化
西アジア	イラン (1972年度)	ペルシア語・クルド語・バルーチー語・バシュトー語・アルメニア語・ジョルジア語などおよび文化
	アラビア (1966年度)	イラク方言・シリア方言・エジプト方言・マグレブ方言・アラビア文語・ヘブライ語(現代ヘブライ語・旧約ヘブライ語)・アラム語・アムハラ語などおよび文化
アフリカ	アフリカ (1964年度)	ハウサ語・フラ語・チュイ語・ヨルバ語・イボ語・メンデ語・マンディンゴ語・スワヒリ語・リンガラ語・ファン語・ズル語・ホサ語・ソト語・ショナ語・ルアンダ語・ガンダ語・アフリカース語・ガラ語・ソマリ語・ベルベル語などおよび文化

言語情報機械処理

現代の電子工学の技術と数理情報の理論を高度に活用して、アジア・アフリカの諸言語のデータを大量に機械処理し、それぞれの言語の音韻論的、辞学的、統辞論的分析はもちろんのこと歴史的、民族学的、社会学的研究のような多目的な用途に供せられるデータ・ベースの作製をはかっています。当研究所としては、最も重要な事業の一つであるアジア・アフリカの諸言語の辞典や文典の編纂に基礎資料を提供して、この方面におけるわが国の立ち後れを克服し、またアジア・アフリカ諸国との多面的、多角的交流という社会的要請にこたえようとしているわけですが、同時にこれは全国の研究者の共同利用にも供されます。この目的のために、一方で各言語のデータについて一定の音韻論的、統辞論的、意味論的、語彙論的情報を分析・形式化し、他方ではこれらの情報を実際の研究に使いやすいようにプリント・アウトするために、デーバナーガリー（ヒンディー、サンスクリット）、ベンガル、タイ、クメール、チベット、アラビア、ハングルなどの文字フォントを作製し実際に使用しています。実際の言語の例としては、ベンガル語、中国語、朝鮮語、ハウサ語、ヒンディー語、クメール語、アラビア語、ペルシア語、スワヒリ語、タイ語、チベット語などのデータが蓄積されつつあります。

言語データのプリント・アウト例（上：アラビア語、下：タイ語）

العرو ۱ . مع شجرة تدعى الكمكام يجلب من اليمن :	MAFATHI10205
سورة الكورة و الأولى أوح و يسمى أيضا التنين و هذه ۱ . ورتة فى الامل واحدى العقدتين تسمى الرأس و	MAFATHI12807
۱ . و هو عى سبل من الزجاج و هو ملح ابيض جلب ۱ . االب قوى و منها السك و هو خربان اسفر و ايب	MAFATHI14815
و الامل ۱ . بى من آلامهم يعمل من زجاج أو فحات على هيئة	MAFATHI14614
و من عيوبه التكبير و هو ۱ . اادة الالفاظ و حروف العلات و الأدوات فى موا	MAFATHI04915
وم و القائم بالفعل فى وقته ذلك كهذا الحائط و هذا ۱ . الجبل و ذلك الانسان	MAFATHI08305
الثدي ككوك و اغلاماه و ۱ . اباه و ابناه و ازيداه	MAFATHI03602
هو الحط الذى يتطلع حط الاشواء على زوايا قائمة و ۱ . ابتداءه من العروة :	MAFATHI13509
المحدوفة من هذه المخروطات كلها ما كان ۱ . ابتداءه من دون الواحد اذا روكم من الأعداد السط	MAFATHI11013

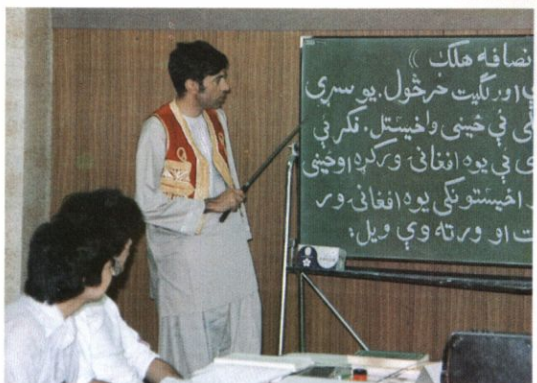
キ-ワ-ド = ไม้

THAASYR01702 จาก-การ-แถลง-ของ-นาย-คินงทุโธย รัฐมนตรี-ช่วย-ว่า-การ-กระทรวง-มหาด-ไทย ใน-กรณี-ที่-รัฐมนตรี-ว่า-การ-กระทรวง-มหาด-ไทย-ได้-ตั้ง-ตั้ง-***ไม้ นาย-ชลอชรรรมศิริ ผู้-ว่า-ราชการ-เชียงใหม่-มา-ดำรง-ตำแหน่ง-ผู้-ว่า-การ-กรุง-เทพ-มหานคร-ว่า-กระทรวง-มหาด-ไทย-จะ-ได้-มี-คำ-สั่ง-ย้าย นาย-ชลอชรรรมศิริ เข้า-มา-ประจำ-กระทรวง ใน-ตำแหน่ง-ผู้-ตรวจ-ราชการ-กระทรวง-มหาด-ไทย ทั้งนี้-เพื่อ-ว่า-เมื่อ นาย-ชลอชรรรมศิริ พ้น-จาก-ตำแหน่ง-ผู้-ว่า-การ-กรุง-เทพ-มหานคร-แล้ว จะ-ได้-กลับ-ไป-รับ-ราชการ-ตำแหน่ง-ประจำ-ใน-กระทรวง-มหาด-ไทย-ต่อไป-ตาม-เดิม-

THAASYR04215 แม้-แต่-เรื่อง-ช่วย-เหลือ-เจ้า-จุน ขณะ-ที่-ยัง-มี-ความ-สามารถ-อยู่ เรา-ยัง-ไม่-ค่อย-มี-จะ-***ไม้

THAASYR04213 แต่-ที่-ผ่าน-มา-เรา-ไม่-ค่อย-มี-***ไม้

言語研修



上：ヒンディー語
左：バシュトー語

アジア・アフリカの言語の習得のための教育訓練は、わが国では開発がおこなわれていた分野ですが、その技術の開発のために、1967年からほぼ毎夏、実験的に、朝鮮語、ベンガル語、現代ヘブライ語、アムハラ語、スワヒリ語、ビルマ語、福建語、チベット語の研修を、それぞれ一言語か二言語ずつ実施しました。1974年からは本格的に行うことになり、当研究所員を中心にその言語を母語とする人、および日本人研究者の協力をえて、東京(二言語)と大阪(一言語)で、初級コースを下記のとおり実施してきました。

年度	研修言語名 (修了者数)
1974	東京：朝鮮語(10)、チベット語(12)
1975	東京：カンボジア語(8)、ベンガル語(12)
1976	東京：ペルシア語(10)、スワヒリ語(9); 大阪：ビルマ語(5)
1977	東京：広東語(14)、マラーティー語(6); 大阪：モンゴル語(18)
1978	東京：タイ語(12)、トルコ語(12); 大阪：ペルシア語(13)
1979	東京：ハウサ語(8)、ビルマ語(14); 大阪：タイ語(7)
1980	東京：ネパール語(14)、モンゴル語(14); 大阪：ベトナム語(5)
1981	東京：ヒンディー語(8)、バシュトー語(10); 大阪：中国語中級(26)
1982	東京：アラビア語(), ハンガリー語(); 大阪：フルフルデ語()

全国から公募された各言語約10名の研修生は検定料、入所料、受講料を納付し、全課程を終えた人には修了証書が授与されます。

各コースの研修時間については1980年度までは226時間でしたが、1981年度以降は150時間です。

海外学術調査

本研究所は、その性格上、アジア・アフリカの現地調査を行うことが重要な機能のひとつとなっています。これまでに当研究所の所員によって組織された海外学術調査は以下の通りです。〔（ ）内は研究代表者〕

- (1) アフリカ部族社会の比較調査
1969年, 1971年(富川盛道), 1974年, 1976年(日野舜也)
- (2) ヨーロッパ東南部農村調査
1970年(岡正雄)
- (3) 東南アジア・ナショナリズムの形成過程における地域社会の変動
1972年(河部利夫)
- (4) イスラム圏社会・文化変容の比較調査
1974年, 1977年, 1980年(三木亘)
- (5) 中国・インド文明接触地帯における自然, 生態と文化に関する調査
1975年(飯島茂)
- (6) 南アジア河川流域米作地帯の農村社会の研究
1979年, 1981年(原忠彦)
- (7) ネパールにおける国民形成過程の人類学的言語学的調査
——ガンダキ水系諸地域住民のネパール化に関する比較研究——
1980年, 1982年(北村甫)
- (8) スーダン・サーヘル地帯における移住と地域形成の調査研究
——ハウサ・フラニ語圏を中心に——
1981年, 1982年(富川盛道)
- (9) 環カリブ海地域における複合文化の比較研究
——アフリカ・アジア系社会・文化空間の変動過程——
1982年～(山口昌男)

助手等の現地投入

アジア・アフリカの言語を自由に話し、読み、書くことができ、かつ、生活を通じてその文化を吸収した研究者を養成するために、本研究所は助手等の若い研究者を、それぞれ2年の期間、アジア・アフリカの諸国に送っています。この計画は1967年から実施され、現在までに合計16名が派遣され、そのうち2名は目下現地で研修中です。

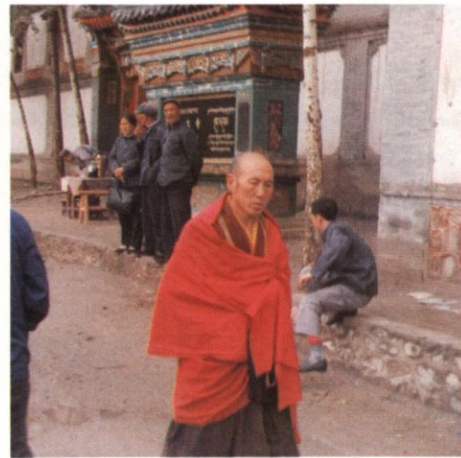
- | | |
|-------------|---|
| 1967年—1969年 | 石垣幸雄(エチオピア地区), 守野庸雄(タンザニア地区) |
| 1969年—1971年 | 松下周二(ナイジェリア地区), 家島彦一(アラブ連合地区) |
| 1971年—1973年 | 内藤雅雄(インド地区), 中野暁雄(モロッコ地区) |
| 1973年—1975年 | 福井勝義(ソマリア地区), 中嶋幹起(香港地区) |
| 1975年—1977年 | 加賀谷良平(ボツワナ地区), 湯川恭敏(タンザニア, ザイール地区) |
| 1977年—1979年 | 石井博(ネパール地区), 藪司郎(ビルマ地区) |
| 1979年—1981年 | 羽田亨一(イラン, トルコ地区), 清水宏祐(アラブ連合, イラン, トルコ地区) |
| 1981年—1983年 | 山本勇次(ネパール地区), 新谷忠彦(ニューカレドニア地区) |

外国人研究員

研究所は、その共同利用研究活動の一環として、外国のアジア・アフリカの言語文化研究の専門家を外国人研究員として受け入れ、研究上の便宜を供与します。現在まで受け入れた外国人研究員は以下の通りです。

- Gordon T. Bowles : アメリカ 人類学専攻 1967年10月6日～1968年9月15日
Muhammad Ahmad Ants : エジプト 近代史専攻 1968年10月2日～12月25日
Raouf 'Abbās Hāmīd : エジプト 近代史専攻 1973年4月1日～9月19日
Yellava Subbarayalu : インド 南インド中世史専攻 1973年10月1日～1975年10月31日
Fe Aldave-Yap : フィリピン フィリピン国語学専攻 1975年9月20日～12月21日
金 完 鎮 : 大韓民国 韓国語学専攻 1975年8月20日～1976年7月31日
Curtis D. McFarland : アメリカ 言語学専攻
1976年2月20日～1977年2月19日, 1979年10月1日～1980年9月30日
'Abd al-Rahim 'Abd al-Rahmān 'Abd al-Rahim : エジプト
中東近代経済史, アラビア語学専攻 1976年6月6日～10月4日
Salim Abdulla Wazir : タンザニア 教育学専攻 1976年6月4日～10月11日
Bhakti Prasad Mallik : インド 言語学専攻 1976年7月13日～12月20日
Karthigesu Indrapala : スリランカ 歴史学専攻 1976年11月1日～1977年3月31日
俞 昌 均 : 大韓民国 韓国語学専攻 1977年4月1日～1978年1月31日
Søren C. Egerod : デンマーク 東洋言語学, 古典学専攻 1977年9月1日～1978年5月31日
Bozkurt Güvenç : トルコ 社会人類学専攻
1978年5月17日～10月31日, 1980年10月1日～1981年9月30日
Thubten Jigme Norbu : アメリカ チベット学専攻 1978年6月27日～1979年3月31日
André-Georges Haudricourt : フランス 言語学, 植物学民族学専攻
1978年10月2日～10月31日
Maria Lourdes S. Bautista : フィリピン 言語学専攻 1978年10月23日～1979年5月12日
William S-Y. Wang : アメリカ 言語学, 音声学, 神経言語学専攻 1979年2月15日～7月14日
Alhaji Faruk Gezawa : ナイジェリア ハウサ語学専攻 1979年4月12日～12月17日
Shyamsunder Joshi : インド ヒンディー文学専攻 1979年5月26日～8月25日
Dor Bahadur Bista : ネパール 社会人類学専攻 1979年5月30日～6月20日
Jean-Baptiste Bunkungu : オートボルタ モシ語学専攻 1979年6月1日～9月30日
Paul M. Thompson : アメリカ 中国哲学・文学専攻 1979年9月16日～1980年9月15日
Chandra Mudaliar : インド 国際関係論, 政治学専攻 1979年10月1日～1980年9月30日
Udom Warotamasikkhadit : タイ 言語学専攻 1979年11月6日～11月28日
Thomas Sebeok : アメリカ 言語学, 記号学専攻 1980年4月13日～4月27日
傅 懋 勳 : 中国 言語学, 民族学専攻 1980年6月11日～1981年3月10日
Samuel H. Elbert : アメリカ ポリネシア諸語専攻 1980年10月1日～1981年1月31日
Kripal C. Yadav : インド 歴史学専攻 1980年10月1日～1981年9月30日
Alain Peyraube : フランス 中国言語学専攻 1980年10月11日～12月10日
徐 在 克 : 大韓民国 韓国語学専攻 1981年5月25日～1982年3月15日
Muhammad B. Mkelle : タンザニア スワヒリ語学専攻 1981年6月19日～12月18日
Maurice Coyaude : フランス 中国言語学専攻 1981年7月1日～7月31日

- William O. Beeman : アメリカ 人類学専攻 1981年9月1日～1982年8月31日
 Marie-Claude Paris : フランス 中国語言語学専攻 1981年9月12日～10月11日
 Talat Tekin : トルコ 古代トルコ語専攻 1981年9月14日～1982年1月11日
 P. A. Narasimha Murthy : インド 政治学, 国際関係論専攻 1981年10月1日～1982年9月30日
 Yoshiro Imaeda : フランス チベット学専攻 1981年10月1日～1982年1月16日
 Ernesto Constantino : フィリピン フィリピン言語学専攻 1981年11月1日～1982年10月31日
 Suresh Awasthi : インド 民俗演劇専攻 1982年2月1日～1983年1月31日
 Salah A. El-Araby : エジプト アラビア語視聴覚教育学専攻 1982年2月1日～1983年1月
 31日
 Kiruja Ruchiami : ケニア ケニア国大統領府学術研究部主任 1982年5月1日～5月31日
 Mohammadou Aliou : カメルーン フラ言語学専攻 1982年6月1日～9月10日



上左：4月，カトマンズ盆地の村で焼米〔チューラ(ネパール語)，バジ(ネパール語)]をつくネワールの農業カースト(ジャブ)の女性。糠つきの米を煮，更に炒ってからつく。(石井 博)
 上右：中国青海省のラマ教聖地クンブム寺にて。広大な寺城の静寂さと，遙かチベットより大きな荷物のかつき参拝に訪れる巡礼者の姿が印象的であった。(中見立夫)
 右：寧波の越劇——浙江の伝統劇「越劇」は主役の男性女性ともに女優が演じるのが特徴。大都会上海で上演されるものはずっと洗練されていて，もう艶っぽいことこの上もない。(中嶋幹起)



施設

電 算 機 室



上：電算機室

左：タイ語データの校正作業中のグラフィック・ディスプレイ端末

当研究所では、1978年1月から、HITAC M-150 システムを導入しました。内部メモリーは1 MB、ディスク装置は6スピンドルで合計1200MB、磁気テープは2デッキあります。入力にはパンチカード、マークカード、紙テープ、TSS 端末が使えます。出力のためにはラインプリンタの他に漢字プリンタがありますが、これを使用して、大きさも形も様々なAA諸言語の文字を印刷できるようなソフトウェアが開発されています。

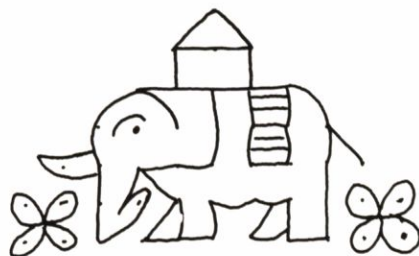
このほかのソフトウェアとしては単語の用例検索システムが準備されています。これはAA諸言語をローマ字や数字におきかえることをせずに、原字のままでパンチ、入力し、データベース化するもので、必要に応じて何時でも任意の単語(列)の用例を検索し、それぞれの固有の文字で印刷することができます。このシステムは、文法研究や辞典編纂の資料作成ばかりでなく、史料や調査記録の索引を作ることもでき、言語学ばかりでなく、歴史学や文化人類学の研究にも活用できます。

またグラフィック・ディスプレイもあり、AA諸言語の研修の自動化等の開発研究も行われています。

1979年度に導入された画像処理システムは、アジア・アフリカの固有の文字フォント作製に威力を発揮しています。

図 書 室

アジア・アフリカ研究に必要な図書および図書利用のための設備は、共同利用研究機関として重要な要素です。研究所開設以来図書資料は徐々に増加していますが、その充実については今後とも多大な努力を要します。蔵書の中にはアジア・アフリカ地域の国語教育資料、雑誌(約550種)、新聞(約60種)、世界各国語の聖書、などが含まれています。図書の他に、マイクロ資料もあり、また利用者の便宜を考えてマイクロリーダーとリーダー・プリンターを備えています。



音 声 学 実 験 室

「ヨルバ語のトーンなんですが、基本周波数の動きは？」

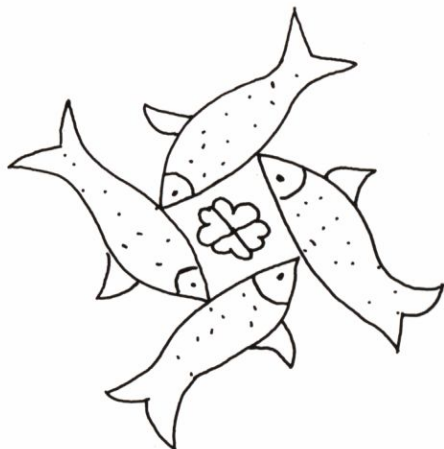
「広東語の声調の上がり下がりを目で見て確かめたいんですが…」

「フラニ語ってどんなことばですか？ 実際に録音したのがありますか？」

「言語研修に使う教材を、良い条件で録音したいんだけど……」

こんな例は、音声学実験室の活動のほんの一部分にすぎません。サウンド・スペクトログラフやピッチ・インディケーターをはじめとした音声分析用機器が、フィールド調査で収集された音声資料の処理にあたっています。また、めずらしい言語や、貴重な民話・民族音楽などのテープが複写され、ビデオ録画なども利用しながら研究分析を行っています。

また付属施設の「音声・言語研修資料室」には各種の語学レコードおよび録音テープがあり、研究者の利用の便をはかっています。



カット：南インドの女性が毎朝、米の粉（近年は石灰）を用いて戸口に描く吉兆文様・コーラム。
（木島千栄子）

出版物一覽

アジア・アフリカ言語文化研究 *Journal of Asian and African Studies*, Nos. *1(1968), *2(1969), *3(1970), *4(1971), *5(1972), *6(1973), *7(1974), *8(1974), *9(1974), *10(1975), *11(1976), *12(1976), *13(1977), 14(1977), 15(1978), 16(1978), 17(1979), 18(1979), 19(1980), 20(1980), 21(1981), 22(1981), 23(1982).

アジア・アフリカ言語文化研究所 通信, Nos. 1~44. (1966~82).

アジア・アフリカ言語文化叢書

1. ビア・アヌマーン・ラーチャトン著・河部利夫訳註, タイ農民の生活, 1967.
- *2. 家島彦一訳註, イブン・ファドラーンのヴォルガ・ブルガール旅行記, 1969.
3. MATSUSHITA, S., *An Outline of Gwandara Phonemics and Gwandara-English Vocabulary*, 1972.
4. NAKANO, A., *Conversational Texts in Eastern Neo-Aramaic (Gzira Dialect)*, 1973.
- *5. TSUCHIDA, S., *Reconstruction of Proto-Tsouic Phonology*, 1976.
6. NAGATA, Y., *Muhsin-Zâde Mehmed Paşa ve Âyânlık Müessesesi*, 1976.
7. YAJIMA, H., *A Chronicle of the Rasûlid Dynasty of Yemen*, 1976.
8. MCFARLAND, Curtis D., *A Provisional Classification of Tagalog Verbs*, 1976.
9. MCFARLAND, Curtis D., *Northern Philippine Linguistic Geography*, 1977.
10. HASHIMOTO, M. J., *Phonology of Ancient Chinese*, Vol. 1, 1978.
11. HASHIMOTO, M. J., *Phonology of Ancient Chinese*, Vol. 2, 1979.
12. KAWADA, J., *Genèse et évolution du système politique des Mosi méridionaux (Haute Volta)*, 1979.
13. BAUTISTA, Maria L., *Patterns of Speaking in Pilipino Radio Dramas : A Sociolinguistic Analysis*, 1979.
14. 石井 溥, ネワール村落の社会構造とその変化——カースト社会の変容——, 1980.
15. MCFARLAND, Curtis D., *A Linguistic Atlas of the Philippines*, 1980.
16. YADAV, Kripal C., *Elections in Panjab : 1920—1947*, 1981.

アジア・アフリカ基礎語彙集

1. 山本謙吾, 満洲語口語基礎語彙集, 1969.
2. 梅田博之, 現代朝鮮語基礎語彙集, 1971.
3. 橋本萬太郎, 客家語基礎語彙集, 1972.
4. 和田正平, イラク語基礎語彙集, 1973.
5. 石垣幸雄, エチオピア比較語句集, 1974.
6. 守野庸雄, スワヒリ語基礎語彙用例集, 1975.
7. 坂本恭章, モン語語彙集, 1976.
8. 中嶋幹起, 閩語東山島方言基礎語彙集, 1977.
9. 奈良 毅, *Avahattha and Comparative Vocabulary of New Indo-Aryan Languages*, 1979.
10. 中嶋幹起, 福建漢語方言基礎語彙集, 1979.
11. 橋本萬太郎, ベエ語語彙集, 1980.
12. 新谷忠彦, ラテ語—ベトナム語—日本語語彙, 1981.
13. 藪 司郎, アツイ語基礎語彙集, 1981.

共同研究報告

1. アジア・アフリカ諸国における国語教育資料の調査研究——中間報告, 1966.
アジア・アフリカ諸国——国語教育資料目録, 1967.
2. アジア・アフリカ言語調査票, 上(1966), 下(1967).
3. 「イスラム化」に関する共同研究報告, Nos. *1(1968), *2(1969), 3(1970), 4(1971), 5(1972), *6(1973),
4. 現代インド・パキスタン文学共同研究報告, Nos. 1(1970), 2(1971), 3(1972).
5. アジア・アフリカにおける宗教運動共同研究報告, Nos. *1(1972), 2(1972), 3(1973).
6. アジア・アフリカ文法研究, Nos. 1(1972), 2(1973), 3(1974), 4(1975), 5(1976), 6(1977), 7(1978), 8(1979), 9(1980), 10(1981).

7. *Asian and African Grammatical Manual* (アジア・アフリカ文法便覧), 1972~:
- | | |
|--------------------------------------|--------------------------------------|
| No. *11. Korean (梅田博之), 1973. | *16b. Samoan (小田真弘), 1977. |
| 11z. Ainu (村崎恭子), 1978. | *17. Persian (上岡弘二), 1976. |
| *12b. Fukienese (中嶋幹起), 1976. | 17b. Baluchi (繩田鉄男), 1981. |
| *12z. Tibetan (北村 甫), 1977. | 17s. Shughni (繩田鉄男), 1980. |
| 13. Indo-Aryan (石垣幸雄), 1980. | *20. African (石垣幸雄), 1975. |
| 13a. Hindi (溝上富夫), 1980. | *21. Swahili (守野庸雄), 1976. |
| *13b. Marathi (内藤雅雄), 1976. | *22a. Cushitic (石垣幸雄), 1972. |
| 13c. Bengali (奈良 毅), 1979. | 22b. Ethiopic (石垣幸雄), 1978. |
| 13d. Khaling (鳥羽季義), 1979. | *23. Hausa (松下周二), 1974. |
| 13e. Panjabi (溝上富夫), 1981. | *26. Fulfulde (江口一久), 1974. |
| 13x. Tamil (徳永宗雄), 1981. | 33. Romance & Greek (石垣幸雄), 1973. |
| 13y. Malayalam (伊藤正二), 1978. | 33y. Basque (石垣幸雄), 1979. |
| *14a. Cambodian (坂本恭章), 1974. | 33z. Maltese (石垣幸雄), 1977. |
| *14b. Burmese (藪 司郎), 1974. | 34a. Albanian (石垣幸雄), 1979. |
| *14c. Thai (森 幹男), 1975. | 36. Uralic <i>etc.</i> (石垣幸雄), 1976. |
| *15b. Philippine (山田幸宏, 土田 滋), 1975. | 40. USSR Major (石垣幸雄), 1980. |
8. アフリカ部族社会の比較研究: 1. アフリカ部族社会の特質をめぐって (1971), 2. アフリカ社会の地域性 (1973).
- *9. トルコ民族とイスラムに関する共同研究報告, 1 (1974).
10. アジア・アフリカ語の計数研究, 1(1975), *2(1975), *3(1976), *4(鄭 嘉彦: 老乞大諺解単字索引, 1976), *5(坂本恭章: カンボジア語小辞典, 1976), *6(1976), *7(1977), *8(1978), *9(1978), *10(1979), *11(1979), *12(YUE, Anne O., *The Teng-Xian Dialect of Chinese*, 1979), *13(1980), *14(藍清漢: 中国語宜蘭方言語彙集, 1980), 15(SHERARD, Michael, *A Synchronic Phonology of Modern Colloquial Shanghai*, 1980), 16(1981), 17(傅懋勳: 納西族图画文字《白蝙蝠取經記》研究〈上冊〉, 1981), 18(徐琳・木玉璋: 僱族《創世記》研究, 1981), 19(1982), 20(SHERARD, Michael, *A Lexical Survey of the Shanghai Dialect*, 1982).
11. *Oceanic Studies*, No. 1 (1976).
- *12. インド・パキスタン分離独立の史的的研究 資料集 *1(1976), *2(1977).
13. 南アジアの大河流域における農村社会の研究: 南アジア農村社会の研究, 1(1977), 2(1978), 3(1979), 4(1979), 5(1980).
14. ヒマラヤ・チベットの生態・言語・文化に関する総合研究: YAK, 1(1977), 2(1978), 3(1979), 4(1980), 5(1981).
15. アフリカ社会の形成と展開—地域・都市・言語 (1980).
16. 日本の言語文化研究リプリント・シリーズ, Nos. 1 (飯島茂, 日本からみた "Thailand: A Loosely Structured Social System," 1981), 2 (岡田英弘, 中国のなかの日本, 1982).
17. *Phraseological Questionnaire*, Vol. 1 No. 1 (*Aquatic Idiomatics*, 1982), Vol. 3 No. 1 (*Proverbial*, 1981).
18. *Performance in Culture*, No. 1 (BEEMAN, William O., *Culture, Performance and Communication in Iran*, 1982).

African Languages and Ethnography

- *1. EGUCHI, P. K., *Miscellany of Maroua Fulfulde (Northern Cameroun)*, 1974.
- *2. MATSUSHITA, S., *A Comparative Vocabulary of Gwandara Dialects*, 1975.
3. MOHAMMADOU, E., *L'Histoire des Peuls Férôbe du Diamaré: Maroua et Pétit*, 1976.
4. EGUCHI, P. K., (tr.), *Shi'r al-Tūba (Poem of Repentance)*, 1976.
5. WADA, S., *Hadithi za Mapokeo ya Wairaqw (Iraqw folktales in Tanzania)*, 1976.
6. NAKANO, A., *Dialogues in Moroccan Shilha (Dialects of Anti-Atlas and Ait-Warain)*, 1976.
7. TANAKA, J., *A San Vocabulary of the Central Kalahari-G//ana and G/wi Dialects*, 1978.
8. MOHAMMADOU, E., *Les Royaumes Foulbe du Plateau de L'Adamaoua au XIX siècle*, 1978.
9. MATSUSHITA, S., *In a Small Town on the Benue—Fula Texts from Gongola State, Northern Nigeria*, 1978.
10. HINO, S., *The Classified Vocabulary of the Mbum Language in Mbang Mboum—with Ethnographical Descriptions*, 1978.

11. EGUCHI, P. K., *Fulfulde Tales of North Cameroon I*, 1978.
12. MOHAMMADOU, E., *Catalogue des Archives Coloniales Allemands du Cameroun*, 1978.
13. EGUCHI, P. K., *Fulfulde Tales of North Cameroon II*, 1980.
14. MOHAMMADOU, E., *Le Royaume du Wandala ou Mandara au XIX^e Siecle*, 1982.
15. EGUCHI, P. K., *Fulfulde Tales of North Cameroon III*, 1982.
16. NAKANO, A., *A Vocabulary of Beni Amer Dialect of Tigré*, 1982.

Studia Culturae Islamicae

1. NAKANO, A., *Basic Vocabulary in Standard Somali (I)*, 1976.
2. MIKI, W., *Index of the Arab Herbalist's Materials*, 1976.
3. YAJIMA, H., *The Arab Dhow Trade in the Indian Ocean*, 1976.
4. NAGATA, Y., *Some Documents on the Big Farms (Çiftlik) of the Notables in Western Anatolia*, 1976.
5. MIYAJI, K., "Kacem Ali" — *Monographie d'un domaine autogéré de la plaine de Mitidja (Algérie)*, 1976.
6. MIYAJI, M., *L'Emigration et le changement socio-culturel d'un village Kabyle (Algérie)*, 1976.
7. MIKI, W., & 'Abd al-Rahîm., *Village in Ottoman Egypt and Tokugawa Japan—A Comparative Study*, 1977.
8. MIKI, W., HONDA G. & M. Salah Ahmed, *Herb Drugs and Herbalists in the Middle East*, 1979.
9. 上岡弘二, 家島彦一, インド洋西海域における地域間交流の構造と機能—タウ調査報告2—, 1979.
10. KAMIOKA, K. & YAMADA, M., *Lārestāni Studies I. Lāri Basic Vocabulary*, 1979.
11. NAGATA, Y., *Materials on the Bosnian Notables*, 1979.
12. SHIMIZU, K., *Bibliography on Saljuq Studies*, 1979.
13. HANEDA, K., *Tabrizi Vocabulary, an Azeri-Turkish Dialect in Iran*, 1979.
14. NAKANO, A., *Report on Moroccan Urban and Rural Life 1—Ethnographic Texts in Moroccan Arabic*, 1979.
15. TSUGE, Y., *Ethnographical Texts in Amharic (I)*, 1982.
16. YAJIMA, H., *The Islamic History of the Maldive Islands by Hasan Taj al-Din (D. 1139 A. H. / 1727 A. D.)*, Vol. 1(Arabic Text), Ed. & Notes, 1982.
17. NAKANO, A., *Somali Folktales (I) — Texts in Somali [I] —*, 1982.
18. NAKANO, A., *Folktales in the Lower Egypt (I) — Texts in Egyptian Arabic [I] —*, 1982.
19. MIKI, W., *Herb Drugs and Herbalists in the Maghrib*, 1982.

Monumenta Serindica

1. IJIMA, S. (ed), *Changing Aspects of Modern Nepal—Relating to the Ecology, Agriculture and Her People*, 1977.
2. HASHIMOTO, M. (compl.), *The Newari Language—A Classified Lexicon of its Bhadgaon Dialect*, 1977.
3. KITAMURA, H. (ed.), *Glo Skad—A Material of a Tibetan Dialect in the Nepal Himalayas*, 1977.
4. MATISOFF, J. A., *Mpi and Lolo-Burmese Microlinguistics*, 1978.
5. HOSHI, M. & Tondup Tsering, *Zangskar Vocabulary—A Tibetan Dialect Spoken in Kashmir*, 1978.
6. KITAMURA, H., NISHIDA, T. & NISHI, Y. (ed.), *Tibeto-Burman Studies I*, 1979.
7. NAGANO, Y., *Amdo Sherpa Dialect—A Material for Tibetan Dialectology*, 1980.
8. NISHIDA, T., *The Structure of the Hsi-hsia (Tangut) Characters*, 1980.
9. THURGOOD, G., *Notes on the Origins of Burmese Creaky Tone*, 1981.
10. BISTA, D. B., IJIMA, S., ISHII, H., NAGANO, Y. & NISHI, Y., *Anthropological and Linguistic Studies of the Gandaki Area in Nepal*, 1982.

言語研修テキスト

- | | |
|---------------------------------|--------------------------------|
| *1. チベット語, 北村甫ほか編, 全5冊(1974). | *4. ベンガル語, 奈良毅編, 1冊(1975). |
| *2. 朝鮮語, 梅田博之ほか編, 全3冊(1974). | *5. ビルマ語, 大野徹ほか編, 全5冊(1976). |
| *3. カンボジア語, 坂本恭章ほか編, 全5冊(1975). | *6. ペルシア語, 上岡弘二ほか編, 全3冊(1976). |

7. スワヒリ語, 守野庸雄ほか編, 全2冊(1976).
8. 広東語, 中島幹起ほか編, 全4冊(1977).
9. マラーティー語, 内藤雅雄ほか編, 全3冊(1977).
10. モンゴル語, 荒井伸一ほか編, 全4冊(1977).
11. トルコ語, 永田雄三ほか編, 全3冊(1978).
12. タイ語, 坂本恭章ほか編, 全2冊(1978).
13. ペルシア語, 勝藤猛ほか編, 全3冊(1978).
14. ハウサ語, 松下周二ほか編, 全3冊(1979).
- *15. ビルマ語, 藪司郎編, 全3冊(1979).
- *16. ネパール語, 石井溥ほか編, 全3冊(1980).
17. モンゴル語, 小沢重男ほか編, 全2冊(1980).
18. ベトナム語, 川本邦衛ほか編, 全4冊(1980).
19. 中国語, 大河内康憲編, 1冊(1981).
20. ヒンディー語, 田中敏雄ほか編, 全3冊(1981).
21. パシュトー語, 縄田鉄男編, 全3冊(1981).

特定研究「言語」出版物

「文字と言語」研究資料

1. HASHIMOTO, M. J., *hP'ags-pa Chinese*, 1978.
2. 橋本萬太郎編, 東干語文字の音表化(資料集), 1978.
3. 橋本萬太郎編, ラテン化新文字(資料集), 1978.
4. 川本邦衛, 現代ベトナム語 漢語「漢字語」語彙集(I), 1979.
5. SCHAANK, Simon H., *The Lu-Feng Dialect of Hakka*, 1979.
6. 吉田 忠, 蘭学における訳語の考察, 1980.
7. 川本邦衛, 現代ベトナム語 漢語「漢字語」語彙集(II), 1980.

「AA諸言語と日本語の学習」資料

- *77-1. 梅田 博之: 基本動詞対照用例集 日本語-朝鮮語1, 1978.
- *77-2. 大河内康憲: 基本動詞対照用例集 日本語-中国語1, 1978.
- *77-3. 坂本 恭章: 基本動詞対照用例集 日本語-タイ語1, 1978.
- 78-1. 梅田 博之: 基本動詞対照用例集 日本語-朝鮮語2, 1979.
- *78-2. 大河内康憲: 基本動詞対照用例集 日本語-中国語2, 1979.
- *78-5. 奈良 毅: 基本動詞対照用例集 日本語-ヒンディー語1, 1979.
- *78-6. 内記 良一: 基本動詞対照用例集 日本語-アラビア語1, 1979.
- *78-7. 守野 庸雄: 基本動詞対照用例集 日本語-スワヒリ語1, 1979.
- 78-8. 梅田博之ほか: 助詞対照用例集1:「の」日本語-AA諸言語, 1979.
- *79-1ab. 梅田博之ほか: 日本語の発音(朝鮮語を母語とする学習者のための日本語発音教材試案), 1980.
- *79-3. 坂本 恭章: 基本動詞対照用例集 日本語-タイ語2, 1980.
- *79-5. 奈良 毅: 基本動詞対照用例集 日本語-ヒンディー語2, 1979.
- 79-6. 内記 良一: 基本動詞対照用例集 日本語-アラビア語2, 1980.
- *79-7. 守野 庸雄: 基本動詞対照用例集 日本語-スワヒリ語2, 1980.
- 79-8. 梅田博之ほか: AA諸言語教育基本語彙表, 1980.

Studies in Socio-cultural Change in Rural Villages in India

1. KARASHIMA, N., SUBBARAYALU, Y. & SHANMUGAM, P., *Land Control and Social Change in the Lower Kaveri Valley from the 12th Centuries*, 1980.
2. HARA, T. & KOMOGUCHI, Y., *Socio-Economic Studies of Two Villages Esnakorai and Peruvalanallur, Lalgudi Taluk*, 1981.
3. 柳沢 悠, 南インド・カーヴェリ河流域の農村社会の史の変容——アバドゥライ村の土地所有関係を中心に——, 1981.
4. SUBBIAH, S., MIZUSHIMA, T., & NARA, T., *Socio Economic Studies of Two Villages; Mahizambadi and Naykulam, Lalgudi Taluk*, 1981.
5. NAKAMURA, H., *Disintegration and Re-integration of a Rural Society in the Process of Economic Development—The Second Survey of a Tank-based Village in Tamil Nadu—*. 1982.

上記の出版物は非売品ですが、著者あるいは編集出版委員会の承認により、研究機関、個人研究者に寄贈することができます。
(なお、*印のものは在庫がありません。)

アジア・アフリカ言語文化研究所
東京外国語大学

東京都北区西ヶ原4丁目51番21号 〒114

TEL 03-917-6111

国電大塚又は王子下車・都電荒川線西ヶ原4丁目

(外語大前) から徒歩約5分

地下鉄・都営三田線西巢鴨下車15分

